

# 日本語総合クラスにおける学び

中 川 千恵子

キーワード

学び 対話 相互作用 関係性 他者

はじめに

早稲田大学日本語教育研究センターでは、1998年度からレベル別に技能別クラスが設けられた。月曜日から木曜日までが4技能クラスであり、金曜日は「総合」というクラスが設置された。各コースは半期で終わり、その後、学習者たちはそれぞれの人生を歩んでいった。総合クラスでの時間は、留学生のみならず、日本人学生ボランティアたち、授業担当者にとって貴重な体験であり、参加者全員がともに学んできたと言える。とくに、5年近く担当した筆者の学びは多大であった。

2004年度には、大掛かりなシステムの変更があり、金曜日の二コマ続きの総合クラスは他の形態のコースとなった。ここで、筆者が5年近く担当してきた総合クラスについて、その実践や学びを振り返り、まとめておくことは意義があるだろう。今後の実践をさらに進める一助としたい。

## 1. 日本語教育と学び

### 1.1 日本語教育とは？

簡単に言うと、日本語能力を伸ばすことが日本語教育の主要な目的であろう。総合クラスは、問題発見解決学習としての総合活動型日本語教育

(細川 2003) の場として設置されたが、一見そうした目的と異なるように見える。しかし、果たしてそうなのであろうか。ここでは、日本語教育に求められるもの、また、目的は何であらうかということを改めて考えてみたい。

野元 (2001:91) は、「教育は、人がより人間らしく生きようとするときに求められる学習活動を支えることに、その本来的な使命がある。」と述べている。何かを学ぶ、あるいは学びたいという動機は、義務教育においても、よりよい生活のためにでも、他の動機のためでも、学習者自身の生き方に密接に関係する。日本語教育だからといって格別違うわけではないだろう。

また、細川 (2003) によると、第二言語を学習するのは、学習者が社会の中で他者との関係を築くことができるコミュニケーション活動能力獲得のためである。日本語学習者の学習目的は多様である。日常生活のため、研究のため、よい仕事を得るため、自分探しのためと多種多様である。だが、この「他者との関係を築くためのコミュニケーション能力獲得」ということが、意識しようとしまいと根底にあるのではないだろうか。

しかし、こうした能力獲得は日本語のような第二言語学習に限らない。単に言葉を知っているだけでは、関係を築くのにコミュニケーション能力を獲得するにも十分ではないということは、日本語学習者のみの問題ではないだろう。では、どうすればこの能力を獲得できるのだろうか。

## 1.2 学習・学びとは？

学習は、教師が学習者に一方的に知識を与えるようなものではないだろう。中川 (2001, 2003) では、総合クラスの実践および方法について報告した。そこでは、留学生・日本人学生・教師の三者が互いに双方向に伝達し合うクラスが実施された。しかし、「双方向」という場合、教える人と教わる人という単なる二分法でとらえていた可能性があること、また、何をどのように伝達したのだろうか、関係は築けたのであろうかというこ

とについての検討や説明は不十分であった。その後、実践を繰り返すこと、議論を重ねることで、筆者自身の学びが深まり、考えは変化していった。

教師の役割については、筆者の考えでは、教え始めた当初から、教師が学習者より優位な存在であるだろうかという疑問を持っていた。教師は十分な知識や話題を提供し、模範解答を提示できる存在なのであろうか。日本人といっても多様である。その中でも、日本語教育という、偏った場所にいる日本語教師がスタンダードな日本人であるといえるのだろうか。もちろん、語学学習において、専門家である教師が主導することを否定するものではない。それも学びである。しかし、教師自身が先導者にならずに、学習者や他の参加者のほうが先導者になる場合もある。学習者自身が学びのテーマを提示し、それについて、教師を含めて参加者全員が暗中模索し、答えを見つけようとするクラス活動があってもよいはずである。答えはひとつではなく、日本語教師がすべてを把握しているわけではないのだから。

たとえば、学習者は、実際場面で、習ったとおりあるいは辞書に書いてあるとおりの意味で語が運用されていないことに気づく。教師はある程度の例を示すことはできるが、それだけでは十分ではない。学習者自身が問題に直面した場合、どのように理解し、コミュニケーションをとり、その問題を解決するかは、他者との関係性に深く依存する。場面や人が異なれば、異なる意味を持つ可能性もあるのである。意味は個人的なものではなく、他者との共存関係の中で相互作用しながら作られる。後述するエピソードはその過程を物語っている。

ワーチ (1995) は、バフチン (1979) の「言語のなかの言葉は、なかば他者のことばである」を取り上げている。すなわち、ひとりの人間の発言には複数の人間の声、つまり歴史的にも、社会的・文化的にも多数の人の声が含まれているという「多声」という概念である。石黒 (2001) は、「わたし」という個の活動の背後には「われわれ」の文化があるという言い方をしている。学習者も教師も、「私は」といいながら、背後の大勢の人の

声を引用し代弁している。コミュニケーションは、単純に一方から一方へあるいは双方向というような方向性だけでは説明しきれない。また、だれのなにを引用し、なにを代弁しているのだろうか。

本稿では、以上のような観点から実際の教室で起こっていることについて、エピソードをあげて説明を試みる。

### 1.3 問題発見解決学習としての総合活動型日本語教育

細川（2003）は、問題発見解決学習の目的は、学習者の総合的なコミュニケーション活動能力をつけること、すなわち、日本語運用能力の向上を目指すものとしている。それは、単に技術的な方法の問題だけでなく、教師の言語観や教育観とも深く結びついているとも付け加えている。

野元（2001）は、フレイレ（1979）のブラジルにおける識字教育の実践理論を日本語教育において具体化することについて述べている。フレイレは、教師と生徒の垂直な上下関係の中で、教師が一方的に知識を注入し、生徒は求められたときにそのまま提示するといった教育を、生徒の客体化と非人間化をすすめるものとして否定した。これに対して、教師と生徒が水平的な関係の中で、課題を共有化し、その課題をめぐる対話を深め、新たな知見を獲得し、現実変革の実践をともにすすめていくという課題提起型教育（Problem-posing Education）の教育が本来の教育のあり方であると主張した。

筆者は、この共同学習の思想、すなわち「教育者もまた教育される」という考えに強く賛同する。その意味で、本稿が筆者自身の学びについて述べることになる可能性を否定しない。以下に述べる実践報告およびその解釈は筆者自身が学んできたこととして、筆者自身の考え（声）が入ることになるだろう。

筆者の担当した日本語総合クラスにおいては、日本語学習者である留学生、日本語ボランティア学生、教師である筆者などの参加者たちが、日本語という共通語を用いて共同体を構築するという実践を行った。目的は、



構築するそのプロセスにあるとも言える。それゆえ、レポートは成果物であるというより、プロセスを示すものである。

## 2. 日本語総合クラスの実践

### 2.1 実践内容

2003年10月17日から2004年1月23日まで半期14回、24コマの授業時間に、日本語が中級レベルの11名の留学生と数名の日本人ボランティア学生が話題を提示して話し合う活動を行った。本稿では、これについて取り上げる。1コマに1名か2名の話題提供とディスカッションがあり、授業後に、教師宛あるいはメーリングリスト宛にコメントを送られる。最終的に、文集『ほのほの』（中川編 2004）を作成するためにレポートを書くことを義務とした。

授業目標として、「自分の目標を考えてください。目標のひとつは多分、『違いを知ること』です。日本語を使って、日本人と自分の国の違いを知ること、自分と他人の違いを知ること…しかし、これは一部です。ここで終わりではありません。日本語の勉強も人生も続きます。今、いろいろなことを知り、何が問題であるかを考えて行くことは、これからも続く学びのプロセスとなるでしょう。しっかり考えてください。」と学生に提示した。「目標のひとつ」並びに「…」というように目標を漠然としたものにした理由は、二つある。一つ目は、目標を閉じたものにしないこと、二つ目は、学生自身が目標を定めることである。目標は、仮説を定めて検証するという形でも、仮説探索で終わってもよいと考えた。そうした理由から、レポートは授業成果あるいは完成品というより、不完全なプロセスを示しているに過ぎないという批判もあった。しかし、筆者の考えでは、目標は高い山も低い山もあってもよい。また途中で他の山に登ることにしてもよい。到達度は人によって様々であって、今、結果を出すことが重要ではない。現実の生活では問題解決は単純ではないし容易ではない。ここでは、対話をし、共同体を構築する過程こそが目標であり重要であると考えた。

留学生は2回話題提供をする義務があった。以下に話題を挙げる。次節にまとめるエピソードの番号を→で示す。

1 回目話題提供 (2003年10月17日から11月21日まで)

- 〈日本のサッカーがなぜ強くなったのか〉(中国女性Lによる)
- 〈杭州について〉(中国女性Y) →エピソード5
- 〈日本の大人のおもちゃ好きについて〉(日本女性N)
- 〈占いについて〉(韓国男性C) →エピソード1
- 〈奇跡を信じることにについて〉(日本女性S) →エピソード1
- 〈若者の投票率について〉(日本男性M) →エピソード1
- 〈日本の可愛らしさ〉(タイ女性P) →エピソード2
- 〈科学(機械・機器)発展について〉(モンゴル男性E) →エピソード3
- 〈友人であること〉(ラトヴィア女性Y)
- 〈マルチメディアとプロパガンダ〉(クロアチア女性M) →エピソード3
- 〈ネット集団自殺〉(ベトナム男性Q) →エピソード3
- 〈パラサイトシングル〉(日本男性K) →エピソード2
- 〈学歴と就職〉(中国女性S)
- 〈日本語の擬態語；擬音語；擬声語〉(モンゴル女性B)
- 〈女性の美しさとテレビ〉(韓国女性B)
- 〈人間は進歩したのか〉(日本男性B) →エピソード3

第二回話題提供 (11月28日から1月9日まで)

- 〈幸せか??〉(中国女性Y) →エピソード3
- 〈日本のサラリーマンについて〉(中国女性L) →エピソード2
- 〈ジョーク〉(モンゴル男性E)
- 〈英語実力は業務能力なのか?〉(韓国男性C)
- 〈小学校からの英語教育の導入について〉(日本女性M)
- 〈クリスマス・正月〉(クロアチア女性M)

〈同性婚とは!?〉(タイ女性P) →エピソード4  
〈虐待〉(日本女性N)  
〈新年と将来の目標〉(ベトナム男性Q) →エピソード3  
〈ストレスをどういうふうに解消しますか〉(中国女性S)  
〈フラッシュモブ〉(ラトビア女性I) →エピソード3  
〈ひとり旅〉(韓国女性B)  
〈イメージ〉(モンゴル女性B) →エピソード5

以上のように、話題は様々であった。同じ学生でも一回目の話題と二回目の話題は一見つながりがないように見える。しかし、対話をし、実践し続けることで共同体の成員が関係を深め、クラスという実践共同体を作っていく過程に繋がっていったといえる。

## 2.2 エピソード

ここでは、いくつか話題を選んで、関連性があると筆者が判断したものを5つのエピソードにまとめる。学生の発表内容の要約、授業時における学生の意見のうち印象的だと判断したもの、メーリングリスト上の感想や意見、文集『ほのほの』掲載の最終レポート、その他話題に関連していると思われるものを筆者の判断で加える。

エピソード1：10月31日〈占い〉(韓国男性C)

〈奇跡を信じる若者〉(日本女性S)

〈投票率〉(日本男性M)

[韓国男性Cの感想]

〈占いについて〉(メーリングリスト上の感想：以下MLと省略)

皆さんのお陰で色々な事について話し合えました。私はこれまで一回も自分のお金をかけて占いにいったことはありません。あまり占いを信じるほうではないし、ほんとにじぶんの運命を決めることは占いではなくてほ

かのことだと思います。これについては決論でもう話したいとおもいます。

〈奇跡を信じる若者〉（文集『ほのぼの』より：以下『ほのぼの』と省略）

先の「占い」と共に通うテーマだと思いました。時々、最近の社会は競争が激しくて、奇跡なしには生きることさえ難しいのではないだろうかとおもいます。実は1億円の宝くじ賞金がなくても努力すると必ず幸せに生きられる社会がいいと思います。けれども、何かよく分からなくて見えない力が自分を助けていると信じるほうが気持ちいいのは間違いないとおもいます。

〈投票率〉

韓国でも若者の投票率はたいてい60%なので、平均（70-80%ほど）と比べて低いほうです。私は今まで経験した全ての選挙で投票しましたので、政治に関心があるほうかも知れません。しかし、私が票を投じた候補が当選したことは少なかったです。これがずっと繰り返すと、必ず私も投票したくないようになってしまいます。ですから、新聞の記事に書いている「35%くらいの投票率」は投票してもあまり政治は変わらないという若者たちの考えを見せていることかもしれません。

〈結論〉

3つのテーマに共通する話がよく分かりませんが、占い好きも奇跡を信じるのも、低い投票率も先がよく見えないからではないだろうかと思います。現在の政治が人々の夢を、特に若者の夢を生かすように努力する必要があります。「大きい変化と発展はいつでも小さい一歩で始まる」と信じています。いつか人々の（若者、または年上の）小さい力が集まって、新しい政治のきっかけになることを望みます。

〔日本男性Mの感想〕（ML）〈奇跡を信じることについて〉

「なぜ、奇跡を信じる人が増えたのか」という疑問が浮かびました。今の社会が若者にとってよい社会ではないから？自分で解決しようとせず人に

すぐ頼る人がふえたから？他にもいろいろあるんじゃないでしょうか。もう少し考えてみたいですね。僕は、奇跡を信じますよ！「自分が今こうやって生きているのが奇跡」というのもありますが、やはり何よりは人との出会いですね。「考え方が変わったなあ」って人に出会えたときかな。今までに数回ですが、そんな時がありましたね。実はこのクラスでも。

エピソード2：11月7日〈日本の可愛らしさ〉(タイ女性P)

[学生の発表内容要約]

日本人は可愛らしいものや可愛い仕草が好きだ。「可愛い！」という時、特別なイントネーションがある。「可愛い」の語源を調べ、考察を加えた。

[韓国男性Cの感想] (ML)

テレビでよく見える「可愛い」や「おいしい」などの誇張された表現の由来について、面白い説明をもらえました。私は日本語を習い始めた時、「可愛い」は「美しい」・「きれいだ」とたいてい同じ意味の形容詞だと思いましたが、日本に来て見たら本当によく使われている言葉でした。

誇張された言い方が悪いところにはあまり使われないことから考えると、相手の気持ちをよくするためでしょう？もし、それが若者同士の一時的な流行に過ぎないかも知れません。けれども、マンガやキャラクターグッズなどの「可愛い」ものに日本の人たちが慣れているのにはちがいないと思います。

[韓国女性Bの感想] (ML)

私もテレビをみて「どうしてそんな声とか行動するのか。」と思いました。いろいろ歴史がありましたね。

[ラトビア女性Yの感想] (『ほのほの』)

日本の可愛らしさや日本の大人のおもちゃ好きも人間関係の面で興味を

引き起すテーマだと思います。「可愛い!!」と言う人に毎日会いますが、あまり気づきませんでした。日本に来てから、毎日何回も「可愛い」を聞いて、あまりびっくりしませんでした。私のラトビアに住んでいる日本人の先生も毎日この言葉を使いましたから、「可愛い!」に慣れて、日本にきました。それで日本人の女の子と話す時、私も「可愛い!」を使います。しかし、自国で日本人の女の子に会わなかった人は、日本に来て、本当にびっくりするそうです。例えば、私の寮に住んでいる外国人（日本語を勉強していない人たち）は毎日「可愛い!」のイントネーションを練習しています!それに、「すごいとか、「へー」とかも彼らの間で人気があるようです。「可愛い!」と言う言葉も、外国人の態度も面白いと思います。笑っている人も、怒っている人もいます。実は、「可愛い」と呼べる話し方や動き方などは、日本の現代のポップカルチャーの一部分だと思います。分かりやすいか分かりにくいかわからず、人によって違いますね。ともかく、面白いですね。

#### [授業担当者（筆者）の感想] (ML)

Pさんの話に対して、いろいろな反応がありましたね。その中で、「可愛い!」はジェスチャーと表情つきでことばなのだ、文化なのだというMさん（クロアチア人：「おいしい」と日本人が言うときのイントネーションやしぐさは他の言葉では代用できない）の発言が印象に残りました。そうですね。ことばは歴史的で文化的（コトバに限らずですが）なのだ、そして「今・この総合クラスで」みなでことばの意味をさがしたり作ったりしているのだなあと感じました。

#### [その他の関連する話題]

中国女性Lはく日本のサラリーマンについて、もっと家庭を大切に「ファミリーケーション」（Lの造語）すべきだと提案した。

日本男性Kによる〈パラサイトシングル〉では、なぜ実家に暮らすこと

が悪いのかという意見がアジア人の多くから出た。ネーミングされた言葉の持つ批判性を鵜呑みにせず、批判的に捉える必要があること、ネーミングから生じる影響の怖さについても考えるべきであることが示された。

エピソード3：11月7日〈科学の発展について〉(モンゴル男性E)

11月28日〈人間は進歩したか〉(日本男性B)

11月28日〈幸せてなんだろう〉(中国女性Y)

[韓国男性Cの感想] (ML)

科学と技術の発展にしたがって、人間にとっても新しい技術に適應することが一番重要な問題になりそうです。例えば、友たちとずっと深い人間関係になることより、コンピュータの新しいソフトウェアを上手に使用できるようになることが有用ではないでしょうか？

面白いことは、韓国の場合は世界一のインターネット普及率を誇る一方で、多くの人々が実は人間関係に渴いているということです。インターネットで一番人気高いことは、結局同じ趣味を持っている同好会のサイトと相手(結婚、友たちなど)を探すサイトです。

やはり、技術では十分ではなくて、欠けているところを満ちることは自分の努力による人間関係でしょう。

[ラトビア女性Yの感想] (『ほのほの』)

科学の発展と言うテーマも面白くて、考えさせられました。一方では、発展は人間の生活をもっと便利にしますし、人間の脳の能力の証拠です。これに対して、発展が大きすぎて、人間が要らなくなるかもしれません。例えば、ロボットや、遺伝子組み換え、クローニングなどはまだあまり発展していないので、数年後にどうなるか誰も分かりません。そして、本当の科学者の発展、科学の発展が悪い人に使われ始めています。それはもう一つの問題点だと思います。歴史を思い出して、このような例がたく

さんあると思います。つまり、科学の発展が必要で、大事ですが、この発展の効果も真剣に考えなければならないと思います。しかし、この場合も問題がありますね。誰が決めますか。誰が責任を負いたいですか。

〈人間は進歩したか〉

〔学生の発表内容要約〕

質問：人間は、進歩していると思いますか。

例1．車の発明によって、人間は時速60キロで走れるようになったかもしれない可能性が邪魔された。

例2．電話の発明によって、人間のテレパシー発達の可能性が邪魔された。

例3．ワープロの発達で、人は漢字が書けなくなった

Bの結論：進歩していない。なぜなら、「神様のバランスシート（ $+-=0$ ）」があるから。しかし、ゼロだから何かを積み上げることもできる？

〔学生の反論・意見〕

確かに人間の頭の中は進歩していない。科学の発展とともに、それに適応するための精神的変化は伴っていないし、うまく適応していない。幸せにもなっていない。一方で、社会的進歩（女性の地位向上、人権など）はした、政治的進歩（民主主義）はあったらという反論があった。また、貧しい国のほうが中ぐらいの幸せがある。日本のようなひきこもりや自殺などの社会現象はないという意見もあった。その他に、よいことの目的のための進歩を悪用する人もいる。人間は欲が深い、また怠け者である。そこからなにが幸せなのだろうというような話に発展した。

〔日本男性Mの感想〕（ML）

「神様のバランスシート」は僕もあると思います。ですが、それでも僕は、『進歩している』と考えています。

確かに、便利であることは一方で何かを失っています。病気で死ぬ人は



少なくなりました。しかし、精神的な病気になる人は増えています。大きな戦争はなくなりました。しかしイスラムとアメリカに代表されるように、対立はなくなるところか激しくなるばかりです。

人間は愚か（おろか：foolish）です。それは認めなくてはなりません。間違った決定をすることも少なくない。しかしながら、「現状を良くしよう」とその時は考えていたのではないのでしょうか。

〔ラトビア女性Yの感想〕（『はのぼの』）

「人間は進歩したのか」も答えるのが難しい問題ですね。私は、人間は進歩したかどうか、はっきり言えません。実は、誰もできないと思います。全ての問題と同じ、人間の進歩も面が二つあります。科学、テクノロジーが発達していますが、人間関係は退歩したと思います。毎年、毎月、毎週どこかで新しくて、もっとうまい機械が発明されていますが、私たちは毎日新聞で新しくて、もっとひどいニュースを読みます。世界中に暴力が広がっていますが、「進歩した」社会はこの問題が解けません。他方では、例えば、100年の歴史と比べて、私たちの生活水準はもっと高くなりましたね。もちろん、国によって違いますが、私たちの頭に生きている生活基準が高いと思います。しかし、アフリカの国などでシチュエーションがぜんぜん違います。

〈幸せってなんだろう〉

〔ラトビア女性Yの感想〕

人間社会の進歩のテーマを続けると、幸せの問題も大事だと思います。実は、時々私たちは自分の幸せを過小評価すると思います。私たちは家に住んでいます。毎日食べ物や飲み物があります。ほかのことについてあまり考えないで、仕事や勉強が出来ますね。しかし、世界中に何も持っていない人が多いですね。彼らに幸せの感じについて聞くと、どんな答えが聞こえますか。もしかしたら、私たちは毎日の問題について心配して、自分

の本当の幸福が見えないようになるだろう？もちろん、個人的な幸せ人間の命でとて、とても大切ですが、自分の心に不幸福感があるとき、もっと大きな社会問題を思い出すと、自分の幸せがわかるようになるだろう。シチュエーションによって違いますが、小さなことも、大きなことも人間を嬉しくさせると思います。

#### [その他の関連する話題]

以上三つの話題は、便利さというものが逆に人間を不幸にしたり、危険を及ぼす可能性があることを示唆している。これに関連する話題としては、ネット自殺という現象も現れたこと（ベトナム男性Q〈ネット集団自殺〉）、インターネットを利用して知らないものが集まって行う集団活動（ラトビア女性I〈フラッシュモブ〉）、テレビは便利だが、知らず知らずのうちに影響されてしまう危険があること（クロアチア女性M〈マルチメディアとプロパガンダ〉）、発展途上国の人の方が目標を持って生きているし幸せな顔をしている人が多いこと（ベトナム男性Q〈新年と将来の目標〉）などがあつた。

#### エピソード4：12月12日〈同性婚とは!?〉（タイ女性P）

##### [発表者のレポート抜粋]（『ほのぼの』）

同性婚は人間の逆らう進歩になるでしょう。同性愛の人々のために変性手術することは医学的に一段と進歩しただろうかと思います。同性愛の人数についてはそれが、出せるか出せないかによって昔と比べたら、そんなに増加していないだろうと思われたようです。同性愛というのは精神病かどうかと反論しました。同性愛の関係はファッションとして使われたという意見も出てきました。タイでは芸能界の中で自分がゲイだと告白した有名な人は何人も居る。テレビでよくオカマのことを放送するし、ドラマでもよくオカマの主演をさせるし、だんだんタイ人は慣れてきたようです。それで、自分はゲイだと女っぽい歩き方、喋り方など、表す人が多くなっ

てしまいました。タイのゲイは西洋人のゲイの振る舞いと違っておかしいと言われました。西洋人のゲイは普通の男性と同じような態度を表すということです。実は隠さないで表したほうがいいと私は思います。なぜかというと彼らにも気持ちが重くならないし、女性にとってもはっきり分かって、迷わないからです。

#### 〔韓国女性Bの感想〕（『ほのほの』）

何回も考えてみても、いい、わるいと簡単という問題ではないと思った。日常的なことがそして社会的に認められたことがいつも正しい、幸せなことか。

そうではないと思う。同性愛、そして同性婚はまだ日常的、社会に認めていることではない。私はこれについてよくわからなくて、ぎゃくに認められている結婚について考えてみた。認められていることはどのくらいしあわせ、そしてどのくらいのひとが満足しているのか。

結論は同じだった。結婚に満足している人もいるし、ぎゃくに幸せじゃない結婚生活で終わった人も多かった。「どうして？社会的に認められていることはいろいろな部分で一番いい、安定的なものじゃなかったのか」

この文を書いている今はそういうこともないと思った。でも今の私は賛成も、そして反対もできない。これはたぶん同性婚を認めたあと、どんな問題が起こるかわからなくてくる恐れかもしれない。

#### エピソード5：1月9日〈イメージ〉（モンゴル女性B）

##### 〔学生の発表内容要約および学生の意見〕

Bはドイツに留学中であり、[KAROUSHI]（過労死）という名前のバーがあることから、このようなメディアが作ってくれたイメージがそのまま私たちのイメージになってしまう場合が多いと考えた。中国人Yが故郷杭州について話題提供したとき、中国は危ないというイメージがあるかどうかを知りたいことであった。

以下、参加者それぞれの日本に対するイメージである。

ラトビア女性Y：1. 伝統的文化（着物・サムライ）2. サラリーマン，  
3. 混んだ地下鉄，人が多い，4. 電気製品

中国女性Y：1. ドラマ・漫画・アニメ・ファッション，2. 礼儀，3.  
少女歌手，4. 過労死

中国女性L：1. あいさつ好き・礼節，2. サラリーマン・残業，3. 化粧  
品・電気製品，4. お見合い結婚，5. 援助交際

韓国女性B：1. 歴史（建前），2. 家を継ぐ，3. 過労死

モンゴル男性E：1. 米・魚を食べる，2. 高層ビルなど発達した国，3.  
仲良くなりにくい・気難しい，4. ジャパニーズスマイル，5. 狭い・き  
つい（ストレス）

ベトナム男性Q：1. きちんと働く・契約を守る，2. みんな忙しい，3.  
車など発達した国，4. うさぎごや，5. 電気製品

タイ女性P：1. 粘り強い，2. 可愛い，3. 気違い（変な人）4. テレ  
ビ番組

クロアチア女性M：1. きちんとした機械を作る，2. 地震，3. 小泉，  
4. 自殺，5. 芸者，6. カメラ（これは日本人でなくとも外国に行けば  
当たり前）

最後にもう一度、自分たちの考えていることについて振り返る話題で  
あった。イメージはどうやって生まれるのであろう。自分の国になくて珍  
しいものが典型的なイメージになる場合がある。憧れているものや興味が  
あるもの、目立つものや特異性があるもの、あるいはまた日本に来たマス  
コミの人などが印象的でアピールしやすいと考えて取り上げたものなどが  
イメージになる場合もある。この最後の場合が国民性と判断されたり、ス  
テレオタイプとなっている可能性が示された。

## 2.3 エピソードの解釈

ここでは、エピソードについての解釈を試みる。掲載した文の書き手は限定されたが、他の参加者たちの声が含まれているものと考えたい。また、ここでの解釈は筆者の学んだことへの解釈とも言える。

### (1) エピソード1についての解釈

佐藤(1999)は、人間は社会・文化の影響を一方的に受ける存在ではなく、自己の外にある外部的なものと相互作用することによって精神活動とその発達は実現されていくと述べている。学習や知識は、個人が帰属し、参加している学びの共同体の中に共有化される形で成立している。

同様に、ワーチ(1995)の説明するバフチン(1979)の「対話性」についての分析とも共通する。異質な者との真の対話から生まれる創造性を指摘した「内的説得力のある言葉」とは、違いがエネルギーとなり、内的説得力ある言葉の獲得へと発展する。

エピソード1では、Cは他者との対話から問題の関連性を見出し、共同体に共通する問題点を探り、さらにその解決策の模索に進もうとしている。Cの結論への思索を紹介したが、そこには参加者たちの声が反映されているといえるだろう。

### (2) エピソード2についての解釈

西口(2001)は、次のように述べている。共同体で使われる言語も、事前に存在するのではない。日本語という目標言語は、事前にあるのではなく、現実の裏づけ(具体的な個人の実情や行為、また個人に起こった出来事など)と具体的な状況の中で使用されることにより、語義(meaning)の力によってメンバーの現実(sense)をそれに編入しながら、共同体の共通言語に成長していく。共同体の言語も共同体の活動の相互作用の中で形成されていく。具体的に埋め込まれた言語記号の使用となる。

また、ワーチ(1995)も字義的意味の不完全性について、孤立した単語こそが普遍性をもちかつ基本的であるということではなく、発話の意味は対話によって異なると指摘している。

このエピソードにおいて、話題提供者の驚きや疑問は、留学生にとって共感を持って受け止められ、日本人にとっては話題の意外性と受け止められた。日常的に使用しているこの語を歴史的にどのような意味で使用されてきたのか、どのように変化してきたのかについて考え、議論しているうちに、言語運用時における意味は辞書だけの語義 (meaning) だけではないことが確認された。言語化することで、いままで自分の中で漠然としていたことが、共同体の参加者同士の対話によって意味づけがなされていき、メンバーの現実 (sense) が加わった。そして、確かめられた意味も、いまのこのクラスにおける意味であって、異なるメンバーによる使用は異なる意味を持つ可能性が示唆されたといえよう。

エピソード2は、語義というものが共同体メンバーの現実との相互作用によって共同体の共通言語に成長していくことを表している。

### (3) エピソード3についての解釈

佐藤 (1999) は、子供の遊びについて、遊びは当初のフレームを維持しながら、相手の言動によって、少しずつずらしをかけながら、誘発 (トリガー) されながら進んでいくと分析している。応答するということは、相手と同じことを反復するのではなく、差異を応答として投げかけていくものであると述べているが、教室活動においても同様の営みが行われているといえるだろう。

エピソード3では、科学の発達に伴い、人間は進歩しているのだろうかという疑問から、人間の幸せとはなんだろうかという単純であって根源的な疑問に突き当たった。そのとき問題になるのは、人と人の関係性であるという気付きは重要である。細川 (2003) の指摘した日本語教育の目的である、他者との関係を築くことができるコミュニケーション活動能力獲得が問題なのである。また、こうした議論はともすれば頭の中だけのものになりがちであるが、「幸せは？」という情意的でしかも人間の根源的な問題に立ち返ることの大切さが示されたと考えたい。

#### (4) エピソード4についての解釈

同性愛を支持する意見というより同性愛への反論のほうが大きかった。しかし、レポート提出の際、Pはあえて、共感の多かった「可愛い」話題よりこの話題を選んだ。それは、話さないより話すほうがよいこと、対話の重要性、これから参加者たちが進んでいく未知への挑戦とも解釈できるだろう。韓国人Bのレポート時にはそれが窺える。

柄谷(1986)は、声や視点が多ければダイアローグやポリフォニーが成立するわけではないが、そもそも対話とは同じ規則・規範を共有している者の間では成立しないと言う。これは「隣り合わせ」の関係であって、そこでの対話は自己との対話、モノローグと同じである。「向かい合わせ」の関係、「対関係」こそが対話の成立する場である。他者との対話＝接触によって暗黙に持っていてしまっている共同体の内部閉鎖的な規範、パラダイムを壊していくきっかけが生まれてくると加えている。

このエピソードは、今後どのように発展するかは未知数であっても、これがきっかけで問題意識が生まれ、外部へ開かれていく可能性を示しているといえるのではないだろうか。

#### (5) エピソード5についての解釈

「わたし」というものの背後に「われわれの文化がある」(石黒 2001)。  
そして、わたしは他者のことばを引用し代弁するが、なにを引用するかというとき、われわれは安易に近くのをを掴み取ったり、目に入った目立つものを取り入れがちである。このエピソードはそれに対する警鐘と捉えられる。同時に、同じ国の人でも視点が違うことがあり、「私」というものは背後に他者の存在があるが、他者のことばを引き取り、引用する場合、何を引用するかはそれぞれの人間によって異なるということも分かる。

この最後の時間に気付いたことは、もう一つの大きな課題であり、改めて大きな問題を発見したのであるとも言えるだろう。常に新しい問題が出現し、問題解決の道は遠い。目標は開かれている。常に終わりのない、閉じられていない道が広がっていく。

エピソードらは、これまでの議論の集大成とでもいえるだろう。教師が提示したわけでもなくとも、ステレオタイプへの気づきが生まれた。エピソード4に続いて外部へ開かれていく可能性を示唆している。

### 3. 再び学び・学習について

#### 3.1 教師の役割は？

佐伯（1993）はレイブラ（1993）の主張を以下のように解釈している。学習は学習者自身の営みであって、教師や教室や教材が学習を左右しているのではない。教師は子どもにとって学びの「師」（親方、熟練者）となるのか、知的探求の「先輩」（古参者）となるのか、実践を「ともにする同輩（near-peers）」となるか、無関係的存在となるかは、子ども自身がどのように社会的関係づくりの実践に関与して生きているかに依存する。教師が「教師になっていく」学びの実践の文脈の中で教育実践がある。

同様のことは、学習者が大人の場合でも言えることである。では、教師はどのような役割を持つものであろう。

西口（2001）によると、プログラム・コーディネーターの役割は、多分に即興的に行われる教室活動において、必要に応じて介添えしたり、他の学習者の介添えを促したりしながら、しなやかに協働的相互活動を進めていくことである。

細川（2003）は次のように指摘している。担当者は、あらかじめ答えを用意できない。問いの答えを見つけ出す作業それ自体を担当者は側面からサポートするしかない。コミュニケーション活動能力を獲得するのは、学習者自身であり、学習者が主体となって行う学びである。

以上から分かるように、学習者自身が主体となって行う学びでは、教師はともに実践を行う存在である。また、必要に応じて介添えをすることが教師の役割となると考えられる。



### 3.2 学びは学習者のみのものではない

西口(2001)は、共同体が発展していくのと連動して、各成員も言語的・認知的・社会文化的により「知性的で有能な」非母語日本語話者になっていくのであると言っている。西口は、ここでは学習者のことをさしているが、教室共同体での成員には教師もボランティア日本人学生も含まれる。「知性的で有能な」日本語話者になっていく過程は、母語とは関係なく参加者全員が共有する過程であると言えるだろう。そして、この過程は、精神病院であり、北海道浦河における画期的な活動を行っている「べてるの家」の川村(2002)の次のような指摘とも共通するものと筆者は考える。

川村(2002)は、精神病の人がうまく自分を表現できないことが問題であり、表現力を会得することの重要性を指摘している。そして、精神病の人が言葉を獲得していく過程は、留学生がだんだん言葉を覚えていき、場面にふさわしい言葉を獲得していく過程と同じであり、精神病の治療の世界というのは、基本的には、日本語学校というか、コミュニケーション教室に参加しているようなものであると述べている。さらに、こうした過程は、病気している人でも、病気でない人でも同じであり、私たち(普通の人間)も言葉を知らない。わかっているようでいて、大事な場面に大事な思いをきちんと出せるようなコミュニケーションを知らないと加えている。言葉と学びに関する、示唆に富む指摘であるだろう。

佐伯(1993)は、子供の学習はアイデンティティの形成過程であると指摘しているが、子供の学習だけに留まらないことである。

細川(2003)によると、担当者は、学習者の「考えていること」を引き出し、それを素材として、担当者自信も気づかなかった新しい世界へと教室を巻き込んでいくことになる。つまり、担当者の知っていることを学習者に与えるのではなく、学習者の「考えていること」の提示によって、担当者もまた他の学習者とともに新しい視野を拓くという発想である。この理念の把握が最も重要な課題となると述べている。

知性的で有能な日本語話者になること、大事な場面に思いを表せるよう

な言葉を獲得すること、アイデンティティを形成すること、新しい視野を拓くことなど、学びは、学習者のみならず、学習に参加するすべての人に起こるものである。

### 3.3 問題提起型日本語教育の意義

野元（2002）によると、課題提起型日本語教育の試みでは、学習者から提示された課題に、学習支援ボランティアがそれまで気づかなかった外国人住民のくらしを知ることができるなど、共同学習を経験することができる。日本語学習を支援する日本語講師やボランティアにとっても学びの場になるという意味合いでともに学ぶことの重要性が強調されることは多いが、必ずしもそうした共同学習が理論化され、具体化されているわけではないと加えている。

西口（2001）は、学習主体が実践共同体の正式メンバーとして実際の活動に参加する、レイヴら（1993）の正統的周辺参加論（LPP）に賛同し、紹介している。正規の教育（formal education）では、そのような参加すべき実践共同体があらかじめあるわけではないが、日本語学習の教室集団において、さまざまな社会文化的背景を持つ人々が、日本語でのおおののアイデンティティや世界観などを表明して、共有することにより、個性豊かな諸個人で構成される共同体を構築するという実践を行うことが可能であろうと述べている。

本稿における活動は、まさに「ともに学ぶ」（フレイレ 1979）という共同学習の実践である。その過程で教育者である筆者を含めた参加者全員の認識を深めることができたものとする。

## 4. こうした研究の位置づけおよびどのように活用するか

石黒（2004）によると、日本語教育実践研究を、これまでの言語学を中心とした基礎科学や、複合的な基礎科学を背後に持つ日本語教育学という応用科学を適用するフィールドだと位置づけるだけでは、関連する科学理

論の試行の場でしかなく、その実践の成果はその理論の枠組において評価されることになる。「フィールドの学としての日本語教育実践研究」を、実践を先に推し進める理論の探求を目指す研究として位置づけている。本稿はそうした研究の一端を担っていると考えたい。

ブルーナー（2004）によると、現実には人がより所としているのは、心理学上の科学的理論ではなく、その文化に住む人が、日常、自分や他者、その心や行為、それをとりまく世界についてもっている常識的見方や価値観、信条、通念等（「フォークサイコロジー」）である。また、人がどのようにものを覚えるか、何をどのようなしかたで教えてゆくのがいいのかについて日頃から抱いている考え方を「フォークペダゴジー」と呼び、教育の理論付けや実践は、教師のもっている文化的なフォークペダゴジーによって左右されることを重視しなければならないこと、そしてそれを明示化する必要性があることなどについて述べている。本稿では、筆者が持っていたフォークペダゴジーを明示化しようと試みた。いうまでもなく、これは共同体内の相互作用によって変化してきたのであり、今後とも変化し続けるものと捉えたい。

社会学者の杉万（2000）は、研究者の役割は、ローカルな共同実践の記録や、そこから紡ぎ出された言説を、自然科学の理論や概念を使って抽象化、一般化することであるといっている。生々しい記録を、一般的な概念を使って、直接の当事者ではない人にも理解できるようにするため、すこしだけ抽象化する必要がある。ローカルな場所・時代から発信された知識は、抽象化のおかげで、他のローカルな場所・時代に伝播していく。ローカルなメッセージ（知識）がより広範な人々のメッセージ（知識）へと鍛えられていくことになる。本稿における実践および抽象化が他のローカルな実践に多少なりとも役立つ知識となることを筆者は期待している。

本稿における実践が山登りの一歩であっても、閉じられていない未来への一歩となると考えたい。今後、さらに学習者や参加者たちとともに共同体を作る作業を行いながら学び続けて行きたい。

## 謝辞

2003年から始めた「しなやかな教育勉強会」（通称「しなべん」）の参加者との読書と対話がなければ本稿はまとめられませんでした。また、学生達、事務所の方々、同僚の先生方、友人達、家族の、時には厳しく、時には暖かい働きかけなくしてできなかったことです。深く感謝します。

## 参考文献

- 石黒広昭 (2004) 「フィールドの学としての日本語教育実践研究」『日本語教育』120号, pp.1-12.
- 石黒広昭 (2001) 「アーティファクトと活動システム」『実践のエスノグラフィ状況論的アプローチ』第Ⅰ部2章, 金子書房, 59-95.
- 柄谷行人 (1986) 『探求Ⅰ』講談社学術文庫
- 川村敏明 (2002) 「病気ってなんですか?」『べてるの家の「非」援助論 そのままでいいとおもえるための25章』V, 浦川べてるの家, 医学書院, 231-248
- 佐伯聡 (1993) 「訳者あとがき——LPPと教育の間で」『状況に埋め込まれた学習』解説, 産業図書, 183-191
- 佐藤公治 (1999) 『対話の中の学びと成長』金子書房
- 杉万俊夫 (2000) 「人間科学のフィールドワーク」杉万俊夫編著『よみがえるコミュニティ』第1章, ミネルヴァ書房, 1-28.
- 中川千恵子 (2001) 「大学における相互教育としての総合日本語の試み—学生や教師やボランティアを含んだインタラクティブな学習—」, 『ひととことば 2000』, 国語と日本語の連携を考える会, 85-94, 139-142
- 中川千恵子 (2003) 「留学生・日本人学生・教師3方向伝達型活動」『「総合」の考え方と方法』第Ⅱ部第8章, 早稲田大学日本語研究教育センター, 96-106
- 中川千恵子編 (2004) 『ほのほの』早稲田大学日本語教育研究センター総合5 ABクラス文集
- 西口光一 (2001) 「状況の学習論の視点」, 『日本語教育学を学ぶ人のために』第4章, 世界思想社, 105-119
- 野元弘幸 (2001) 「フレイレ的教育学の視点」, 『日本語教育学を学ぶ人のために』第3章, 世界思想社, 91-104
- バフチン, M. M. (1979) 伊東一郎訳『小説の言葉』(ミハイル・バフチン著作集5), 新時代社
- ブルーナー, J. S. (2004) 『教育という文化』岩波書店
- フレイレ, P. (1979) 『被抑圧者の教育学』小沢有作他訳, 亜紀書房.
- 細川英雄 (2003) 「「総合」の考え方 問題発見解決学習としての総合活動型日本語教育」『「総合」の考え方と方法』第Ⅰ部, 「総合」研究会編, 早稲田大学日本語研究教育センター, 1-16
- レイヴ&ウェンガー (1993) 『状況に埋め込まれた学習』産業図書

ワーチ, J. V. (1995) 『心の声』 田島信元他訳, 福村出版